



島の婆鹿尾菜と共に干されをり
 芥子の花けふもどこかに人柱
 逝く夫の胸に篠笛みどりの夜
 地の底を走る地鳴りやみどりの夜
 神々の哄笑に蝶生れけり
 カミユ読む連休ウィルス禍の立夏
 鶯の声の断面真青なり
 句稿書く遠き春雷聴く如し
 チンチラを作る父と子昭和の日
 地に近き信濃のくらし葱の花
 つちふるや父荒るる日の牛も荒れ

*

死の街に円柱の生え五月かな
 硝子越し宇宙観るごと金魚の眼
 湖明けや黒曜石に映る貌
 エゴイズム蔓延る社会柏餅

奥山源丘
 山崎妙子
 折井眞琴
 大野今朝子
 吉澤利枝
 水野星闇
 真弓ぼたん
 渡嘉敷皓駄
 小林邦子
 高橋佳世子
 遠藤順子

金子圭子
 山田勝文
 宮澤和子
 土屋忠史

攻めるとは魚捌くこと青嵐
 木の根開く身に産道といふ道も
 アスパラガスとは毘沙門天の剣
 芒しき湯に揺れなじむ菖蒲束
 初夏のデイトスポット擬似餌店
 生きるため生きる喜び捨てる夏
 をとこにもかはいげ大事囀りぬ
 大量の鮎の箱なり戸惑ひぬ
 墓跳び損ひていけしやあしやあ
 新しきご近所さんや春の暮

*

初花や胎児の名前呼んでみる
 五月晴風たをたと溢れけり
 菖蒲湯に入りて上がれば漢どき
 青梅の激しく落ちるひとりの夜
 春水を孕む春水流れゆく

玉木愛子
 篠遠良子
 長尾裕美子
 村田朋美
 市原啓子
 山口忠弘
 谷口とし子
 吉田かん乃
 平澤寿美枝
 小野す美

佐々木寿子
 福田登美子
 小熊旭
 若尾伸子
 峯敦子

岳の源泉 七月 (491)

— 同人集・岳集・青雲集から

宮坂 静生

はじめに。コロナ禍のさなか、通信で句稿を見た。なかなか巧みだ。塾居の余裕が句作に影響を与えたものか、コロナ禍前より深く考え、細部に気を働かせた作品は多い。それだけに全体のバランスはいいが、大胆な冒険作は乏しくなる。交流自由、コロナ禍以後はどうなるのか、気になる。私個人としては金子兜太が最晩年にしきりに口にした「アニメズム」ということを勉強し出している。気になることは表現者の自我表現と対象の精霊との交感、一体化のあり方だ。

島の婆が干される―ユーモアのあり方

島の婆鹿尾菜と共に干されをり 奥山 源丘

家を出て、浜に並べた鹿尾菜の前で一日過ごす。やることがないのである。さんさんとお日さまを受け、日干しになるようだ。「と共に」が説明調。着想はいい。表現技法が気になる。

芥子の花けふもどこかに人柱 山崎 妙子

神にいのちを捧げる「人柱」。あるいは事業などをやりとげるための犠牲者を指す。未開民族の間では人権意識よりも信仰が優先する。芥子の花の配合は後者を意識したものか。コロナ禍以後の社会でもいのちとは何かが改めて問われる。

地の底を走る地鳴りやみどりの夜 大野今朝子

上高地辺を震源に、しばらく局地形地震が続いた。作者の居住地島々谷は地鳴りが酷かったと聞く。平穏なみどりの夜に、自然の凶り難い神秘が恐怖に変わる不気味さを捉えた時事句。

神々の哄笑に蝶生れけり 吉澤 利枝

コロナウイルスが地球上を襲う。「神々の哄笑」とはそれか。人類への試練と感じたものか。蝶を遣わした。これも計らい。岳集の「幼児のあいやのほろる草の花」にも目を留めた。「あんよは上手」を方言で「あいやのほろろ」というとか。冒険作。

カミュ読む連休ウィルス禍の立夏 水野 星闇

いいたいことを連ねた作であるが、遣り切れなさが出ている。俳句の究極は一元化か複雑化かは依然として課題だ。

鶯の声の断面真青なり 真弓ぼたん

感性がどこまで対象に迫れるか。鶯の声の断面を青と見た。季節は早春。情緒ではなく、モノとして音声を掴む。試作。

句稿書く遠き春雷聴く如し 渡嘉敷皓駄

今月の秀句

逝く夫の胸に篠笛みどりの夜 折井 眞琴

作者の夫、柁太郎さんはかつて岳の誌友として活躍された。イタリア旅行にも一緒に、思いが深い。お好きな篠笛を柁に入れた。優しい人柄が偲ばれる。折から緑夜。長女の女医文香さんに、「文香は立派になった」と洩らされた一言も印象深い。優れた数学の先生でもあった。太郎さんの他界からの声援を受け、いよいよ眞琴の活躍が期待される。

句集『二月風廻り』を上梓。評判だ。句集に入れる句を書いているときの実感か。比喻にも季節感が生かされている。

チンチラを作る父と子昭和の日 小林 邦子

「チンチラ」は石を抛る水切り遊び。昭和の父子は遊びも手近な自然相手。『暦と暮らす』（宇多喜代子・NHK出版）や『それでも日本人は「戦争」を選んだ』（加藤陽子・朝日出版社）など昭和ものを読んでいる時だったので注目した。

地に近き信濃のくらし葱の花 高橋佳世子

天や空ではなく地をいったのがいい。葱の花も配合が適切。

つちふるや父荒るる日の牛も荒れ 遠藤 順子

暮しと思うように回らずに荒れる。牧畜が生業の父か。これが今も昔も大方の庶民の暮しだ。特にコロナ禍ときては荒れたくなる。

他に同人集推薦候補作をあげる。

テレワーク倦めり剪定でもするか 満田 光生
坂のぼるとき春月にささへらる 永島理江子
還らざる人の数ほど辛夷咲き 寺地 和子

これも宇宙観―水槽の金魚

硝子越し宇宙観るごと金魚の眼 山田 勝文

水槽に飼われた金魚がこちらを見ている。その眼が宇宙を
観る眼だ。ものは相対的。人間の観る宇宙と金魚が人間界を
観る見方とがどこかで通じる。金魚流にいえばわれわれは宇
宙に住むと同じ。教えられる。ぐんぐんめきめき腕を上げて
いる諏訪の新進。過日、バナナの叩き売りの卑近な芸を見せ
て貰った。あれ以来、句もいい。諏訪の救世主か。

湖明けや黒曜石に映る貌 宮澤 和子

今月の秀句

死の街に円柱の生え五月かな 金子 圭子

東京のスカイツリーをいったものではない。たとえ
ば、コロナ禍の町の中央に、ある日、ピサの斜塔のよう
な円柱が不意に立った。誰もびっくりしない。見える人
には見える。能天気な人は気づかない。俳句は見える人
には見える句を作る。作者は演劇人。さすがに時代の空
気を掴むのが巧みになった。

芒しき湯に揺れなじむ菖蒲束 村田 朋美

「芒しき」はちくちくする意。珍しい形容詞に出会い、び
っくり。ことばの世界の奥深さに、菖蒲湯の知的な素朴さが
見事に合う。

初夏のデートスポット疑似餌店 市原 啓子

相手は釣りが好み。疑似餌屋が現代のデートの場とは、個
性的！

生きるため生きる喜び捨てる夏 山口 忠弘

入院中人工呼吸でもして、ともかく生存を優先させたもの
か。コロナ禍で外出を控えることでもよい。ぎりぎりの表現
であろう。俳句でいえる限界に挑戦している。

をとこにもかはいげ大事囀りぬ 谷口とし子

大人の男にいつている。子どもでは面白くない。八十歳に

今月の秀句

五月晴風たをたと溢れけり 福田登美子

五月の風のふんだんな形容「たをたと」が発見。見方
に余裕がある。

「海明け」は名高いが、それに準じた「湖明け」は珍しい。
信州和田峠男女倉遺跡は、旧石器時代から黒曜石の産地とし
て名高い。岡谷在住の作者。黒曜石にわが貌を映し、うっと
りしたものか。道理で自信がついてきた。地貌の自覚は自信
をつける。発見！

エゴイズム蔓延る社会柏餅 土屋 忠史

エゴイズムを句に取り込んだ。それだけでも凄い。そこで
どこかの大統領でも連想すれば折から口にする柏餅もまた別
味。人類進歩の価値観など吹っ飛ばす社会の修復は困難だ。

攻めるとは魚捌くこと青嵐 玉木 愛子

瀬戸内の柳井辺の漁師ことばか。積極的な姿勢が伝わる。

木の根開く身に産道という道も 篠遠 良子

大地にも道をつける雪解頃、産道という道を想像した迫力
が魅力だ。

アスパラガスとは毘沙門天の剣 長尾裕美子

神社仏閣に詳しい作者。アスパラガスの一本一本が善神の
剣とは、発想が自在である。

なってもか。

大量の鮎の箱なり戸惑ひぬ 吉田かん乃

高山で観光ホテルを経営する斗南子一族。鮎の荷が届く。
箱が素朴で具体的。こんなに大量の鮎が届いて「わあーっ」
て感じ。率直。

墓跳び損ひていけしやあしやあ 平澤寿美枝

「いけしやあしやあ」にはびっくり。墓だから、俗語が生
きる。やれるところまで追求すればよい。底が深い。

新しき近所さんや春の暮 小野 す美

小川軽舟句集『近所』を読む感じ。作者は塩尻の名人。

青雲集

他の青雲集の作者もめきめき腕を上げている。

初花や胎児の名前呼んでみる 佐々木寿子

菖蒲湯に入りて上がれば漢どき 小熊 旭

青梅の激しく落ちるひとりの夜 若尾 伸子

春水を孕む春水流れゆく 峯 敦子

寿子の可憐、旭の男前、伸子の鬱勃、敦子の艶。みな秀
逸。

推敲・添削 ⑥●●●●●●●●●● 宮坂 静生

○気になる表現 有名な句を安易にパロディにしない
例句 雀の子そのけそのけ車が通る

これは一茶の下五「御馬が通る」(八番日記)を茶化した句のつもりだろうが、底が浅い。これはお遊びに過ぎません。
原句 里山やふつくら柔肌若葉風

若葉どきになり、里山がふつくらしてきたことを言いたい。「ふつくら」「柔肌」と、同じことを重ねない。骨になることばを探して、ぐいと言おう。

添削 若葉風一氣に山の際立てり

○このように推敲し添削する
焦点を一つにしぼる

原句 脱殻に陰陽石に蟬時雨

藤森 岳仁

添削 蟬の殻陰陽石にすがりゐる

あたり一帯、蟬がしきりに鳴くという場景であろうが、陰陽石を出す以上、蟬の殻(空蟬)に焦点を当てたらどうか。

原句 紫陽花が瞳に映える朝の君

添削 紫陽花の朝な朝なや君恋し

紫陽花の紫紺が君の朝の瞳に映える。これはいいことが言えたと喜んでいない。ロマンチストは皆これで出来たと思うが、観念的。紫陽花と恋しい君とを強引に関係づけるのがいけない。紫陽花が美しいと描写し、君が恋しいと言えば、読み手が関係をつけて鑑賞する。この切り離しがポイント。

原因にあたることを直接出さないで、表現に工夫を

原句 若葉風葉擦れささやくごときかな 福田登美子

添削 若葉いま葉擦れささやくごときかな

「風」「葉擦れささやく」。風を出さない方がいい。

原句 逝く祖母の篤き表情新樹の夜 青木 義典

添削 逝く祖母の篤きおもてや新樹の夜

「表情」は平凡。「おもて」(顔つき)くらいか。

原句 ごつごつと甘夏の面伊予の風 山岸 俊一

添削 ごつごつと甘夏伊予の風とどき

「面」はことばがきつい。面を省き、伊予の風を感じたくらいの表現にすることで、伊予を連想する。

原句 支えられ薄墨桜尚凜と 木下めぐみ

添削 支えられ薄墨桜咲きつづく

老木になり支えられても尚凜としている意。そこまで強調しないで、支えられていることだけを言えばいい。

原句 卒業写真この頃の眉凜として 丸山 盛茶

添削 卒業写真その頃の眉凜として

「この頃」ではなく、「その頃」がいい。

原句 花冷に落ちそな弦月西に花冷す 佐藤 悦雄

添削 落ちそうな弦月西に花冷す

ことばの細部をていねいに表現することが大事。

原句 ダービーも無人開催テレビ有り 土屋 隆

添削 ダービーも無人開催コロナ禍^{まが}

「テレビ有り」でなく「コロナ禍」を入れて変化をつける。